

自由と悪

——カントの根本悪——

東 道 成

この発表は、カントの『単なる理性の限界内における宗教 *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*』(一七九三年)の第一篇で論じられた「根本悪 *das radikale Böse*」の思想をいわゆる批判期に表わされた自由論の延長において考察しようとするものである。すなわちこの『宗教論』において人間の自由の問題が、根本悪という思想によってより一層の明確化と徹底化を遂げたともみなすのである。

自由は、『宗教論』以前では主として道徳および善との関係で述べられてきた。そこでは自律 *Autonomie* としての意志の自由が、道徳性の最上原理であり、また積極的な意味での自由概念とされたのである。反道徳的な行為における自由の問題は、そこでは欠落している。しかし道徳を論ずるに当って、善のみを取り上げてそれと対立する悪を問題にしないのでは、道徳をその全体性において捉えたとは言えないであろう。従って自由を善の方向でのみ論じるのではなく意志規定の根本へ立ち返って、善意志をも転倒させる悪への性質が自由の前提の下で考えられれば、それだけ自由が幅広く論究されるであろう。

カントによれば、人間は理性的存在者 *vernünftiges Wesen* である。しかしそれは感性を備えた理性的存在者である。故に純粋な実践理性による道徳法則の命令は、そのような不完全な理性

的存在者に対しては「汝為すべし」という無条件の断言的な義務としてのみ有効であった。すなわちこの理性の自律からは、感性に基づく一切の動因は捨象されねばならなかったのである。しかしそもそも感性的諸傾向性は、悪と何ら直接の関係はない。というのも傾向性は「天賦のものとして *als anerschaffen* 私達を創始者としない」(S. 36) ので自らその責を負うことができないからであり、それどころかえって「道徳的根根 *die moralische Gesinnung* が働いてゐることを証示しようとするもの」に、すなわち徳 *Tugend* に機会を与える」(ibid.) のである。またカントは、悪の根拠を道徳的に立法する理性の腐敗 *Verderbnis* の内におくこともしない。これは人間理性の自律ということ認めずに、道徳法則の意識から全く解放された「邪意ある理性(端的に悪しき意志 *ein schlechthin böser Wille*)」(S. 37) の存在を考えることである。しかしカントは、このように人間を悪魔的存在者に仕立て上げてしまつてそこに悪の根拠をみようとするにはあまりにもその含むところが多すぎるし、逆に感性を悪の根拠とみて人間を単に動物的なものとしてしまつては、その含むところがあまりに少ないとして両方とも斥ける。

カントの自由は、『宗教論』においても自己関係性において成立する。具体的には自己の意志がいかなる格率 *Maxime* を採用するか——他者の命じた格率を採用するか、それとも独自の原因性に基づく格率(道徳法則)を採用するか——にかかっている。そして悪の根拠も「選択意志 *Willkür* が自らの自由を使用するために自己自身に設ける規則のうちのみ、すなわち格率のうちのみ存することができる」(S. 19)。そこでカントは、人間本性にある「悪への性癖 *der Hang zum Bösen*」について三つの段

階を考える。その第一は、パウロの「私は十分に意欲はするが果たすことができない」(ローマ人への手紙七の一八)という歎きのうちに示される人間本性の脆さ *Gebrechlichkeit* である。第二は、選惡意志を規定して義務の要求するところへ向かわせるためにこの動機の他になお別の動機を必要とする性癖で、人間の心情の不純 *Unlauterheit* と言われる。ただしこの第一と第二の性癖による悪は、故意になされたものでなく、また意図的に自らが招いたものとは認められない。しかし最後の第三の性癖こそ、人間本性のうちにある根本的な悪への性癖である。それは道徳法則から発する動機を他の道徳的でない動機よりも軽視して、自由な選択意志の動機に関してその道徳的秩序を転倒する性癖である。故にこの性癖は、道徳法則を意識しつつもそれに背反する格率を故意に採用するところにみられるもので、人間の心情の悪性 *Bösartigkeit* と呼ばれる。

さてカントは、何故この心情の倒錯を根本的だと規定するのであろうか。これについての説明は、大体二つの側面からなされているように思える。一つは、この性癖があらゆる格率の根拠を腐敗させ「私達のうちに真正の道徳的根の基礎を据えることを妨げる」(S. 40) からである。もう一方の説明は、「この性癖の可能性へ戻ってその成り立ちから始める。それによると悪への性癖は、私達の本性と分かちがたく結びついており人間にあって普遍的であるが、それというのもこの性癖はその起源を時間的起源 *Zeitursprung* から区別される理性的起源 *Vernunftursprung* に持つからである。従ってそれは一切の時間的制約を受けずに単に理性によってのみ認識される。カントが悪への性癖を「英知的所行 *intelligible Tat*」(S. 32) とするのはこのためである。これは、

善のみならず悪についても本来的に英知界の自己において成立し、現象的經驗的事実として直接に見られるものでないことを意味している。換言すれば、經驗的な結果として感知される行為そのものにおいては善悪は決定されず、その行為が選択意志によって格率として採用される際の動機の道徳的秩序まで戻らなければ善意は成り立たないということである。しかもこの善意は、道徳法則から発する動機を命令として聞きうる自由な理性的存在者におけるものであるから、その善悪の責任はあくまで「その人自身によって招かれたものとして *als von dem Menschen selbst zugezogen*」(S. 20) 行為者自身にある。そしてカントはこのことを確認した上で、しかし悪への性癖は「自由に行為する存在者として人間のうちに見い出されるものであるから、これに打ち克つことが可能でなければならぬ」(S. 39) とするのである。そこには人間における根源的素質 *die ursprüngliche Anlage* は、「なお善への素質であり、しかもそれは「人間本性の可能性に属する」(S. 26) というカントの深い確信がある。カントは、「この道徳的素質の純粋性を回復することを人格性 *Persönlichkeit* として見られる人間の最大の課題とする。そしてカントによればそれは「心根における革命 *eine Revolution in der Gesinnung*」(S. 51) によって実現される以外になく、要するに「義務が私達に命ずるのは私達に実行可能なことだけである」(S. 53) と見通して《汝なすべしであるが故になしうる》という境地に立つことである。私達はこのままで来て、かえって『宗教論』の自由論 (*Winkur*) から批判期の純粋な形式的自由論 (*reiner Wille*) が開けて来るように思えるのである。

(註) 引用のページ数は『宗教論』の PhB 版による。